7年目の能登空港

大場飛行士の郷土訪問飛行から84年。今では1日4回、旅客機が能登の上空を飛んでいる。「能登に空港を―」。その夢は現実となって、首都圏と能登半島を1時間で結ぶようになった。
7年目を迎えた能登空港の現状を、石川県空港企画課に聞いた。

石川県空港企画課
山崎 悦朗 課長補佐

―**全国の地方空港の現況は。**

山崎　長引く景気低迷や新型インフルエンザ、高速道路料金の割り引きなどにより、全国的に航空機利用者が減少していると聞いています。

　どれくらいの搭乗率があると航空会社の採算が採れるのかは、ビジネス客や団体の観光客などの客質によって異なるので一概に何パーセントと言えないそうですが、航空会社は不採算路線の減便・撤退などの経営改善に取り組んでおり、地方空港にとって大変厳しい状況となっていると言えます。

―**能登空港の6年目を分析すると。**

山崎　能登空港の開港6年目、つまり昨年の7月7日から今年の7月6日までの利用状況ですが、4月ごろまでは利用者の約8割を占める首都圏からの観光客が順調に増加したことから、地元利用者の減少分を補いほぼ前年並みでした。しかし、新型インフルエンザの影響で、5月ごろから首都圏からの利用者が急激に減少したため、一時は目標搭乗率の達成に赤信号が灯りそうになりました。地元の多くの方々に利用していただいたおかげで、何とか62％を達成することが出来ました。

　地元の方々の何が何でも目標搭乗率を達成しようという熱い思いを再認識しました。

　7年目に入っても、まだまだ航空需要は厳しい状況が続いています。これまで以上の観光誘客と地元からの利用促進に、早め早めに取り組んでいく必要があると考えており、毎月、地元の行政や経済団体の方々といろいろなアイデアを出し合って利用促進に取り組んでいます。

―**運航ダイヤ改善の可能性は。**

山崎　運航ダイヤについては、午前便は早く、午後便は遅くすると、地元からの利便性が格段に高まるので、利用促進につながると考えられますが、改善にあたっては首都圏からの利便性にも配慮する必要があります。

　首都圏の旅行会社からは、前後に1時間程度ならば影響は少ないと聞いており、県としてもANAに対して運航ダイヤの改善を要望しています。しかし、ちょうど良い時間帯は、どこの地方空港も利用を望んでおり羽田空港の発着枠が満杯の状態であることから、検討させてほしいとしています。

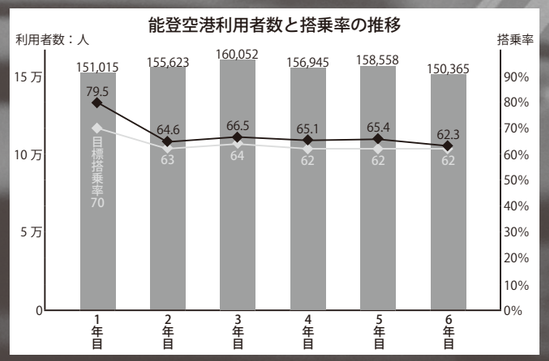
　来年秋の羽田空港再拡張という機会を捉えて、ダイヤ改善につなげていくためには、引き続き目標搭乗率を上回る高い搭乗率を維持していくことが大切と考えています。

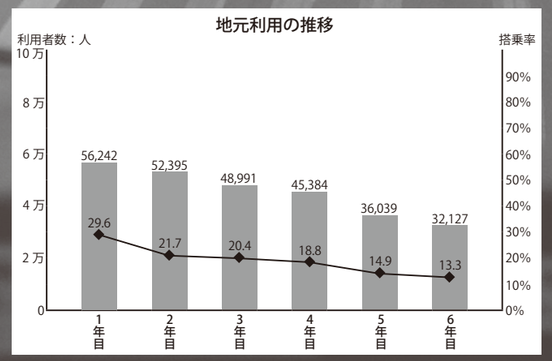
―**能登空港を守るためには。**

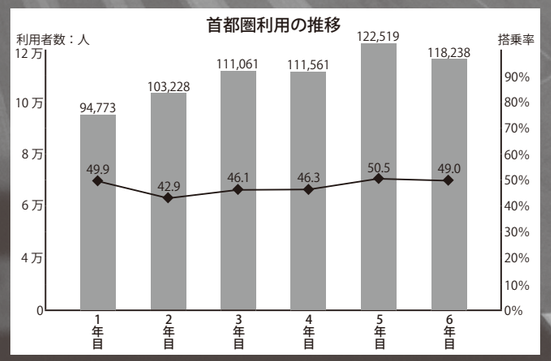
山崎　能登空港は、単なる航空機の発着施設というだけではなく、行政との合築や「道の駅」への登録、航空学園や海上保安庁施設の誘致など多目的に活用しています。

　また、地元住民に能登空港を身近に感じてもらえるように、ターミナルビル内で市町が持ち回りで自分の市町のPRをしたり、空港周辺で各種団体がイベントなどを開催しています。

　このような取り組みによって、『能登空港は自分たちの空港』という意識が醸成され、航空機利用につながっていくことを期待しています。







国際チャーター便利用状況

年度	便数（片道）	行き先	利用者数
15	8	韓国、台湾	1,035人
16	76	台湾、中国	8,920人
17	116	台湾、中国	12,148人
18	65	台湾、韓国	7,850人
19	105	台湾、中国（香港）	12,468人
20	90	台湾	11,999人